

# 嗚呼茫々の

(昭和十一年寮歌)

穴戸昌夫 作歌  
村岡五郎君 作曲

榆陵謳春賦

われらが三年を契る絢爛のその響宴はげに過ぎ易し。然れども見ずや穹北に  
瞬く星斗永久に曇りなく、雲とまがふ万朶の桜花久遠に萎えざるを。  
寮友よ徒らに明日の運命を歎かんよりは、榆林に篝火を焚きて、去りては  
再び帰らざる若き日の感激を謳歌はん。

## 三

嗚呼茫々の大曠野  
先人ここに芟りて  
建てし自由と自治の城  
その源は遠くして  
濁世叱咤す六十年の  
苔むす青史誇りなん

さはれ今宵の我が寮  
「人生意気」に集い来し  
結びとけぬ友垣が  
光明と權威謳ふとき  
星屑原始林に輝きて  
流転の相を示すなり

## 二

老桜の蔭や北辰の下  
少時旅寝の若き子が  
自治燈かかげ聖鐘うちて  
情眼れる魂を覚醒すべく  
降魔の剣かざすとき  
狂へる颯も声ひそむ

## 四

ああ感激の美酒は  
廻りて早きその三年  
希望の光恵めては  
榆林にかはす盃に  
啓示の翳を泛べつつ  
男の子の眸に涙あり